

NPO 法人 日本ビオトープ協会  
第 14 回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

◇顕彰委員会委員長の講評

『ビオトープフォーラム in 東京 2022』（2022 年 6 月 17 日、全水道会館）にて

まず最初に、第 14 回顕彰を受賞されました団体の方々にお祝い申し上げます。本協会では、ビオトープの普及啓蒙を目的として、全国の優秀なビオトープを表彰してきました。

14 回となりました今回も、各支部から優れたビオトープが推薦され、特に生物多様性の象徴「ホタル」を掲げる事例が多くありました。いずれもが、多様なステークホルダーの協力によるビオトープの造成に始まり、維持管理、環境教育、地域貢献など優れた取り組みであり、高く評価できました。個別の講評をさせていただきます。

◎ビオトープ大賞を受賞されました、愛知県「トヨタの森 TOYOTETSU FOREST」は、豊田鉄工本社工場内のビオトープであり、2015 審査委員長賞を受賞して以来、生物多様性を豊かにする活動を活発に行っています。矢作川水系の「生態系ネットワーク」としての役割を担いつつ、SDGs の普及啓蒙の場として活用するなど、地域住民も参加した取り組みを行っています。

◎同じくビオトープ大賞の、富山県「日産バイオパーク西本郷」ですが、2008 年、日産化学富山工場において、環境影響を測定するための試験田跡地に造成した企業ビオトープです。次第に輪を広げた活動を行い、学校教育の場、地域に開かれたコミュニケーションの場となっています。ビオトープの維持管理、訪問者への対応も優れています。

◎学校ビオトープ大賞に選定された、茨城県「学校観察園 ホタルの森」は、ひたちなか市前渡小学校のビオトープであり、20 数年前から既存環境を生かした整備が進められてきた、学校ビオトープです。子供たちのビオトープレンジャーは、遊学会（おやじの会）の協力もあり、ノウハウが継承されています。ゾーニング別の維持管理が適切になされています。

◎環境活動推進賞に選定された、山形県「寒河江慈恩寺 ホタルの里プロジェクト」は、寒河江市慈恩寺に設けられた里のビオトープであり、ホタル及びその生息環境が復元されています。協議会では、マコモダケの生産・販売を行い、持続可能な農業の振興につなげるなど、ビオトープ利活用の先進事例としても高く評価できます。

◎地域貢献賞に選定された、愛知県「西中ホタル保存会 SDGs M Biotop Garden」は、知立市の農業遊休地を活用したビオトープです。行政、地元小学校、地域団体、企業が連携した運営が維持されています。年々規模を拡大させており、生物多様性保全のシンボリックな「ヘイケボタル」を中心とする地域在来種の保全と再生も行っている点が評価されました。

5 件表彰させていただきましたが、各団体におかれましては、ビオトープの普及啓蒙、環境教育、地域活性化につながる活動を継続していただくようお願い申し上げます。

（協会代表顧問 鈴木邦雄顕彰選考委員長）



※フォーラムの顕彰事例発表「トヨタの森 TOYOTETSU FOREST」「日産バイオパーク西本郷」「学校観察園ホタルの森」は、後日 YouTube で映像を公開する予定です。 2022 年 6 月 22 日

## ◇ピオトープ大賞

【下記各顕彰書類より転記】

名 称	トヨタツの森 TOYOTETSU FOREST
受賞者	豊田鉄工株式会社、株式会社鈴鍵
<p><b>【テーマ・概要】</b> 『トヨタツの森』は、豊田鉄工本社工場の敷地内にあり、総面積 4,800 m<sup>2</sup>程ある緑豊かなピオトープです。“人と自然が共生するあいち”の実現をめざして 2013 年に策定された「あいち生物多様性戦略 2020」と協調し、まちなかに生き物呼び込み東の矢作川と西の丘陵地帯を結ぶ「みどりの回廊」として造成しました。そして、トヨタツグループ環境取り組みプラン 4 本柱の一つである、自然共生社会に向けた取り組みが『トヨタツの森』です。 2015 年度のピオトープ顕彰では、審査委員長賞をいただきましたが、木々はまだ小さく草地も落ち着きがない状態で、これからの成長を期待するばかりでした。 そんな『トヨタツの森』も完成してから 9 年目となり、様々な表情を見せてくれるようになりました。木々は大きく育ち、草地も様々な草が生え、多くの鳥や昆虫が訪れ、生活をしています。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b> 2015 年度のピオトープ顕彰に応募された時は、完成した直後で草木も小さく裸地が多い状態でこれから成長していくピオトープだったと思います。現在のトヨタツの森は、まさに本物の森に近づいたと思います。時がトヨタツの森を成長させ、多くの生物を呼び寄せることができるようになりました。継続して行ってきた生物調査の結果からもわかります。 また、環境学習についても、長年にわたり社員の親子や地域の皆さんに様々なイベント・活動を通して、生物多様性や自然保護の重要性について工夫をしながら取り組んできました。</p>	



## ◇ピオトープ大賞

名 称	日産ピオパーク西本郷
受賞者	日産化学株式会社 富山工場、日産ピオパーク西本郷サポートチーム
<p><b>【テーマ・概要】</b> 環境影響を測定するための試験田跡地に造成した企業ピオトープです。 失われた自然の回帰をテーマに、「動・植物にとって生息しやすい、水辺と里山林を中心とした生物多様性空間を作り、地域や工場社員の憩いの場とする」を目的に 2008 年に開設されました。約 2 ヘクタールの土地に湿地、池、小川、芝生広場、花畑を配置し、近隣住民、工場 OB・OG、社員の協力の下、絶滅危惧種であるゲンジボタルやカブトムシの繁殖などにも取り組み、生物多様性保全活動を推進し、SDGs の 17 目標の 1 つ、「15 陸の豊かさを守ろう」に貢献しています。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b> 設置の目的は 1. 動植物にとって生息しやすい空間の回帰 2. 生物多様性の重要性を学ぶ場 3. 近隣住民に開放する憩いの場 4. 暴風時における調整池の機能 動・植物の生息を主体として整備された日産ピオパーク西本郷には花畑エリアや、周辺に果樹園も併設されており、地域に開かれたコミュニケーション・スペース、近隣の幼稚園や小学校の教育へも幅広く活用されています。 設置当初より地域や会社 OB・OG、現役社員のボランティアにより構成されたサポートチームが中心となり維持管理を行っています。</p>	




## ◇学校ピオトープ大賞

名 称	学校観察園 ホタルの森
受賞者	ひたちなか市立前渡小学校、株式会社砂押園芸
<p><b>【テーマ・概要】</b> 当地は、ひたちなか市馬渡地区、本郷川水系の谷戸地に掛かる学校敷地で、数十年来、竹や樹木が繁茂し人が立ち入れないような場所でした。今から 24 年前、正門周辺整備工事に伴う調査において、湧水が流れ込む 2 つのため池が存在することがわかり、当時の校長先生から、子供たちが自由に観察できる場所として活用できないかと「学校観察園」が発案され、整備がはじまりました。数年後、当地での生き物観察を通して聞こえてきた「ホタルが飛んだらいいな」の声をうけホタル再生活動がスタート、その目的に合わせ水路や周辺環境整備に着手しました。 このピオトープの名称「ホタルの森」はその際、児童たちの公募で選ばれたものです。以降、地域の方の協力をいただきながら活動をすすめ、2011 年には初めてヘイケボタルの幼虫を放流、そして自然発生のサイクルを目指し、定期的に学習会、観賞会を実施しています。ホタルの森の活動には様々な方が参画し、学校だけでなく地域の方にとっても貴重なものとなっています。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b> 既存の環境（湧水、湿地、ため池、雑木林、傾斜地）をできるだけ活かし、ホタル再生のみならず野鳥や湿生植物、水生昆虫などの既存生物に配慮しながら、以下のような整備管理を行っています ・ゾーニングを行い、特に入り口や観察路を明確にすることで、生物域と児童の活動域を明確に区別 ・ヘイケボタルの自然繁殖を目指し、飛翔、繁殖期には街灯に遮光版設置や体育館当該力所に暗幕を設置するなどの工夫 ・ホタル生育周期に合わせ適宜除草や樹木剪定など ・間伐、伐採木、池の浚渫土などは持ち出さず敷地内で有効活用 ・児童による専門委員会「ピオトープレンジャー」が、校内活動として定期点検や看板製作などのピオトープ啓蒙 ・既存在来生物に配慮し、アメリカザリガニ二等外来種駆除を定期的に行っています。 今後もこのような身近な自然を学校と地域が一体となり、守り育てて生きたいと考えています。</p>	



## ◇環境活動推進賞

名 称	寒河江慈恩寺「ホタルの里プロジェクト」
受賞者	NPO 法人グラウンドワーク寒河江、寒河江慈恩寺「ホタルの里プロジェクト」協議会
<p><b>【テーマ・概要】</b>                  寒河江市の慈恩寺地区を流れる田沢川流域は、かつてホタルが乱舞する水田地帯で「ホタルの里」として市内でも有名な観光エリアでした。しかし、上流の太郎地区において耕作放棄地が増え続けたことで里山は荒廃し、生態系へ悪影響を及ぼしてしまい、ホタルの姿はほとんど見られなくなってしまいました。                  そこで、ホタルが住みやすい環境づくりとして、農地再生やピオトープの造成、並行してホタルの飼育と放流を行い、「ホタルの里」を復活させ、地域資源を活かし多くの人が訪れる賑やかな地域づくりを目指すために取り組んでいます。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>                  平成 29 年度に圃場 2 枚を活用し、太郎地区の米に代わる新たな特産物として試験的にマコモダケを栽培。翌 30 年度から本格的にピオトープゾーンの造成と田んぼの再生に取り組みました。                  ピオトープゾーンには、蓮の栽培や苗木の植栽を行い、定期的な整備活動（除草作業等）を実施しています。また、最初の 2 年はホタルの飼育と放流も行いました。今年度で 4 年目となりますが、3 年目から放流を行わずともホタルが舞う姿を見られるようになり、今年度は乱舞する光景を見ることができました。                  田んぼの再生では水路を設置し、現在では 6 枚の圃場でマコモダケを栽培しています。水管理はもちろん、並行して環境整備活動（田んぼの草取りや周辺の草刈り等）も実施しています。収穫したマコモダケは商品化・販売までを行い、持続可能な農業を目指しています。                  今後も「ホタルの里」再生のために、農地や水路・ピオトープゾーンの良好な管理に努めていきます。</p>	
	

## ◇地域貢献賞

名 称	西中ホタル保存会 SDGs M Biotop Garden
受賞者	西中ホタル保存会
<p><b>【テーマ・概要】</b>                  自然と対話が紡ぐ「里山ならぬ里町づくり」を目指して、①自然保護の横綱である「ホタル」が飛翔する里町づくり ②土と緑に親しみ、対話が弾む里町おこし、が原点で、③その後の、「SDGs未来都市知立」選定を受けた知立市とコラボした諸活動の展開を鋭意推進中。                  当プロジェクトは、分断化した農業遊休地化・荒廃化を防止すると共に、再開発・活用することで、生態系サービスを考慮した自然再生の「先進再開発モデル事業」として、又、新しい形の「市民交流活性化」を視野に入れてスタート。地元市民主体による未来プロジェクトのひとつとして、又同時に「超高齢化社会に対応した地域未来社会のあるべき姿」として少しずつ作り上げてきました。活動着手当初は2拠点だったが、現在は西中町で6拠点まで順次拡大しつつあります。</p>	
<p><b>【整備方針と管理手法】</b>                  ホタルの再生と共に、生物多様性の維持・拡大を軸に整備。在来種の保護・保全・再生は重要なテーマであり、カキツバタ、花ショウブ等の地域在来古種の保全やヘイケボタルの育成等を行い造営・管理中。ナゴヤダルマガエル、カワバタモロコやチュウサギ、アキアカネ等の絶滅・準絶滅危惧種の保全・保護も大きなテーマの一つとして行いつつあります。                  生物多様性保全のシンボリック存在として、地域在来種であるヘイケボタルが清い湿田に今も生息中で、毎年 4-5 月には放流会、5-10 月には恒例の鑑賞会や自然観察会等多くのイベントを開催中。当活動は地元小学校のホタル再生協議会を軸に、生態系構成員の一員として、多くの地域団体と連携、年々規模を増殖し、2021 年度はこれまで知立市では 2 拠点⇒10（西中町では 2⇒6）拠点到拡大し、「ホタル」が飛翔する里山ならぬ里町づくりの外輪が具現化しつつあります。勿論、2021 年 5 月に認定された「SDGs 未来都市“知立”」づくり推進活動にも余念がありません。さらに、ピオトープ整備の着目点は、キジ等の在来固有種を守るために、「管理・整備されたゾーン」とは切り離れた「非管理ゾーン」のゾーニングも、生態系が多様化する大きなカギにもなっています。</p>	
	